

# ジークフリート その愛と死

— 日本の視点から — (1)

Siegfrieds Liebe und Tod

—unter einem japanischen Gesichtspunkt —

金成 陽一

KANARI Yoichi

## I 時代と愛

「ニーベルンゲンの歌」が書かれたのは、中世ドイツ文学の黄金期といわれる 12 世紀末から 13 世紀初めである。同じ頃日本では平家を滅ぼした頼朝が死に、北条氏が実権を握っている。武士は 11 世紀半ばから既に社会的身分として定着し、源氏、平家を中心とする二派と主従関係を結んで、鎌倉幕府が成立した後は封建社会の中心的階級となっていたのである。このような日本の状況は、本格的に封建制のシステムが定着して王と騎士階級によって政治の改新が行われ始めたヨーロッパ世界と、不思議なほど良く似ている。

初期中世以来女性はずっとキリスト教に嫌われ続けてきたというのに、12 世紀になると急に賛美されるようになってきた背景には、当時ヨーロッパに広まり出した「マリア崇拜」がある。「処女にして母」というマリアの優しいイメージが広まって来ると同時に、美しい貴婦人に対する愛を賛美する騎士文化が生まれてきたのである。身分高く近寄りがたき美しき人妻は、まさしく聖母のように男たちに礼讃されたのだが、しかしそれ以外のほとんどの女たちが蔑視され嫌悪されていた状況に変わりはない。

騎士文化の発達に拍車をかけたのが、1096 年から三年にわたった第一回十字軍の軍事遠征であろう。その引金は、イスラム勢力に小アジアを奪われたビザンツ帝国がローマ法王に救いを求めてきたことである。本来は政治的かつ経済的な事由による救済の依頼であったはずなのに、時の法王ウルバヌスは、ここにキリスト教の聖地エルサレム奪回の錦の御旗を掲げたのだ。800 年にフランク王国の皇帝となったカール大帝の時代、既に戦士たちのある者は騎士と呼ばれていたのではあったが、しかし鉄の鎧に身を包み楯と槍と剣で武装し馬にまたがった戦士の姿が定着するのは 11 世紀以降で、騎士は戦がなくとも城を警備し、訓練に従事して主君に仕えることになったのである。

美しき既婚の貴婦人に対する恋とは取りも直さず不倫であり、要するに初めから叶わない確率の低

い恋に情熱を注ぐ訳である。簡単に成就してしまう愛にはあまり意味がないと考えられ、どこまでも騎士にとってはひたすら耐え忍ぶことが重要であったから、その意味では若い独身女性よりも、美しき人妻を対象とする方が当然ながら成功率は少なかった。叶わぬ恋だから尚更情熱的になってしまうものなのか、あるいはそこに希なき愛に耐え続ける己への自虐性が潜んでいたのかはよくわからない。それにしても、「耐える恋」こそが究極の愛の形と主張する騎士道の観念は、時代は違うのになんと良く「葉隠」の教えに似ているだろう。享保四年（1719年）に死んだ山本常朝が騎士道について熟知していたとも思えないが、西と東で同じような恋愛観を持つ人間がいたのは面白い。「葉隠」には、「恋の至極は忍恋と見立て候。逢ひてからは恋のたけが低し。一生忍んで思ひ死にする事こそ恋の本意なれ<sup>(1)</sup>」。と書かれている。

「恋の悟りの究極は忍ぶ恋である。

恋死なん 後の煙にそれと知れ

つひにもらさぬ中の思ひは

という歌があるが、そのようなものだ。生きて命がある中に自分の恋を打ちあけるのは深い恋ではない。恋い焦がれて思い死にをする恋が、このうえない立派な恋だ。」

騎士の場合にも、自分が恋する女性の名を絶対秘密にしておかなければならないのは同様であった。耐え忍ぶという状況は同じでも、「葉隠」があくまでも精神的プラトニック的な恋を推奨しているのに対して、騎士の恋は不倫なのだから、あまり堂々と胸を張って主張できるものでもなかっただろう。また、それは決してプラトニックラブなどではなく、当然ながら美しき熟女に対する肉体的な憧れは大きかったのである。

## （前篇） II ブルグント国

「ニーバルンゲンの歌」第一章は、ライン河の畔ヴォルムスにあったブルグント王国の「いともあてなる姫」(ein edles Mägdlein) クリエムヒルトが見た夢から始まる。冒頭既に、「彼女のためにはあまたの勇士が命を失う運命であった」と、凄まじい結末が予告されているのだ。このように各詩節の四行目には、所々将来の悲劇が予告されており、ここでも「あでやかな姫を護っていた兄の国王グンテルとゲールノートは、二人の夫人のあいだの仲違いのため、痛ましい最期を遂げる」とある。物語は次々と英雄たちを紹介していくけれど、とりあえずグンテルの重臣トロゲネのハゲネ(ハーゲン)の名を覚えておこう<sup>(2)</sup>。

クリエムヒルトが見た夢は、「彼女が飼っていた強い美しい猛々しい鷹が二羽の鷲の爪に引き裂かれた」というのであった。当時、鷹はゲルマン人の間では愛人のシンボルとして鷲より高く評価されていた。ホーエンシュタウフェン朝の皇帝フリードリッヒ二世が「鳥を用いた狩猟術」なる本で自ら

鷹狩論を著したのは1247年頃だが、アジアの遊牧民によって開発された鷹狩は既に民族大移動の時代にはヨーロッパに伝えられていたようだ。当時、女性が加わることでできた唯一の狩が鷹狩で、「鷹は公生活に置いて卓越した役割を演じていた。人々は高い身分のしるしとして鷹を誇示し、訪問や儀式の折にはこぶしにとまらせた<sup>(3)</sup>」という。鷹は貴族だけが所有を許された鳥であったから、平民や農民は鷹狩の権利などまるで持ってはいなかったのである。

クリエムヒルトから夢の話聞いた母ウオテは、「そなたが飼っていた鷹というのは気高い殿御のことじゃ。運が悪いと、そなたは殿御をじきに失わねばなるまい」と占う。クリエムヒルトは「自分は一生結婚するつもりはありません」と否定するものの、母は「この世で心から楽しく暮らせるとしたら、それは殿御の情を受けてこそのこと」と取り合わない。初心な娘と母親とのこんなやり取りはいつの時代でも繰り返されてきたことだろう。娘は「恋というものをあきらめた」と書かれたそのすぐ後に、「ニーデルラントの国に気高い王子が生まれた」と、話は第一部の主人公ジークフリート（ジーフリート）に移って行く。

いずれにしてもこの予知夢とも言すべき不吉な夢が、物語全体の悲劇を暗示させているのだ。若きジークフリートは夏至の日に、父王ジケムントから騎士の称名を賜る。当時、貴人の子弟は21歳になると君主から剣を受けて、騎士の称号を授けられたのである。

日本の男子が奈良時代以降11～16歳の間に元服を済ませたのに較べると、ドイツの若者が21歳でやっと騎士となるのは随分と遅い感じがする。日本の元服は、幼名を廃して実名を名乗り、大人への仲間入りをする儀式であった。髪を結び服を改め、清涼殿への昇殿を許される堂上家以上の場合は冠、それ以下（地下）は烏帽子を着用したが、近世になるとこれも次第に簡略化されて、月代を剃るだけで済ませたようだ。

さて、ジークフリートの父ジケムントは息子の元服の祝いに数多の騎士たちや楽人らを呼び、パーティーは七日間も続いたのだ。そして国王は共に元服をした仲間には豊かな所領を、楽人らには「山と積まれた贈物」を与えたのである。支配者はこのような時、惜しげもなく人々に贈物を与えるのが当時の習慣であった。吝嗇やしみみたらは一番蔑まれるべき性格で、国王たるものは戦に勝った時や祝い事などの時には大盤振る舞いをしなければならなかった。だから、国王ジケムントの振る舞いは当時のしきたりに基づいていたのである。よく知られているのはフランク王国前半期のメロヴィング朝における王たちの貪欲さであろう。彼らはあらゆる手段で富をかき集め、貯め込んで惜しげもなく臣下に配っていたのだが、それはひとえに威信を保つためであった。

フランスでは昔から全ての社会階層で贈物を交わす習慣があった。身分高き者たちは高価な宝石を贈り合い、召使たちには金銭を与えたという。

これでもかと気前よく物を施す王の姿をテキストは次のように述べている。

王は若きジーフリートをして、嘗て自分もなしたように

土地や城をば人々にわかち与えさせた。

それで王子は共に元服をした仲間に、豊かに所領をあたえたので、  
みなみな、この国を訪れたことを打ち喜んだ。(39)

風の噂にブルグント国に「世にもうるわしき姫のあらん」ことを聞いたジークフリートは、十二人のお伴の騎士を連れて出かけていくことになる。

一方ブルグントの宮殿では、これら立派な騎士たちが一体どこからやって来たのか、グンテル王も含めた皆訝しく思ったのであった。そこへ王に呼ばれてきたハゲネは、次のように言う。これ以降彼の説明によって、如何にして勇敢なるニーベルンゲン族がジークフリートによって滅ぼされたのかの経緯が、読み手によくわかるようになっているのである。

某は確<sup>しか</sup>と申陳べ参らせん。

某未だジークフリートを見しこと候はねど、

那處<sup>かしこ</sup>に凛々しく推参なしたるは如何な<sup>ことわり</sup>事由に候ふとも

正しくその者ならんと覺え侍るなり。(86. 服部正巳訳)

ニーベルンゲン族の富貴な王子シルブング (Schilbung) とニベルンク (Nibelung) が山の洞窟から宝を運び出していた時に、偶然通りかかったジークフリートは二人からその宝を分配してくれるよう熱心に頼まれた。しかし二人は分配に不満で、結局役目を果たせなかった彼は怒って名剣バルムンクで彼らを打ち、ニーベルンゲンの武士七百人をも征服してしまった。その上ジークフリートは主君たちの復讐をしようとした侏儒アルプリーヒから隠れ蓑を奪い、宝の持主ともなったのである。宝は元の場所に戻されて、アルプリーヒがその見張り役となったのだった。

ハゲネの話は「そのほかにも私はあの男についていろいろ知っております」と続く。

「あの勇士(ジークフリート)は、ある時竜を退治しました。彼はその血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化したのです。どんな武器も彼を傷つけ得ないことが度々証明されました」(100)

テキストがジークフリートの竜退治について述べているのはこの部分(第三章)と、ずっと後の第十五章で、ハゲネの「もしもあの方(ジークフリート)が何者かに傷でも負わされることをご心配なさるなら、どういう工夫でそれを防いだらよいかお聞かせ下さいまし。私は馬上でも徒歩の場合でも、いつもご守護いたしましょう」との甘言によって、クリエムヒルトがジークフリートの急所を教えてしまう部分だけである。彼女は次のように言っていた。

「私の夫は勇敢で、<sup>りよりよく</sup>脊力も秀でています。

曾て山の麓で竜を退治した折、あの元気な人は全身に

竜の血を浴びたのですが、それからというもの、  
戦いにおいてどんな剣にも決して傷つけられることはありません。  
ただ私が恐れるのは、もしあの人が戦場に立って、  
勇士たちの手から沢山の投槍が飛んできたりしたら、  
私は愛する夫を失いやしないかと、心配なのです」(899～902)

この後ハゲネは言葉巧みに、「どこを守ればよいかかわかるように、あの方の衣掌の上に小さな印をぬい付けておいて下さい」とクリエムヒルトを騙し、結局、ジークフリートはハゲネにそこを背後から槍で突かれて殺されてしまう。

いずれにしても「ニーベルンゲンの歌」で、ジークフリートがどのようにして竜退治をしたのかはよくわからないから、「ヴォルスング・サガ」ではどのように語られているのか、シングルズ(ジークフリート)の活躍を少しばかり読んでみることにしよう。

シングルズは鍛冶工である養父レギンから、レギンの兄ファーヴニルが巨大な竜に変身して莫大な宝を守っている話を聞く。二人が、荒野のファーヴニルが水を飲む時に這ってゆく道の所へ行った時、「穴を掘ってその中へ入れ。竜が水のところまで這ってきたとき、彼の心臓を突き刺して殺せ」とレギンは言った後、怖気づいて逃げてしまった。

シングルズが穴を掘っていると、長い髯を生やした一人の老人(オーディン)が来て言う。

「それは得策ではない。沢山穴を掘って、血をその中に流すがよい。だが、お前は一つの穴に入って、竜の心臓を突き刺せ」

それから老人は姿を消した。シングルズは言われた通りに穴を掘った。

さて、竜が水のところに這ってきたとき、激しい地震が起こり、あたりの大地はすべて震えた。道々に毒を吐きながら進んできたが、シングルズは恐れず、その物凄い音にもひるまなかった。そして竜が穴の上に這ってきたとき、左肩の下を剣で突き刺した。すると柄まで刺さった。シングルズは穴の中から躍り出て、剣を引きぬくと両腕は肩まで真赤になった。さて、巨大な龍は致命傷を負ったことを知ると、頭と尾をつかっていた打ちまわり、当たるものは一つ残らず粉碎した<sup>(4)</sup>。

致命傷を受けたファーヴニルはシングルズといくつかの会話を交わした後、最後に言う。

「お前に忠告する。馬に乗って、出来るだけ早く去るがいい。致命傷をうけた者が復讐することはよくあることだから」

シングルズは答えた。

「お前はそう忠告する。だが、おれはそうはせん。お前の穴まで馬でいって、お前の身内が所有していた莫大な黄金をそこで手に入れるのだ」

ファーヴニルは答えた。

「お前はそこに行って生涯使い切れぬほど多くの黄金を見つけるだろう。だが、その同じ黄金がお前の死に、また、他の者が所有したら、その者の死になるのだぞ」

シングルズは立ちあがっていった。

「おれが決して死なないということがわかっていたら莫大な財産を失っても、馬で帰宅しよう。勇敢な男はだれでもその日がくるまですべての財産を所有していたいのだ。だが、ファーヴニル、お前はヘル(死の女神)がむかえにくるまでそこで死の苦しみにあがいておれ」

こうしてファーヴニルは死んだ<sup>(5)</sup>。

ヴァグナーが「ニーベルングの指環」を創作するにあたってテキストとしたのは、「ニーベルングの歌」ではなく北欧神話の「エッダ」や「サガ」であった。彼は子供の頃にヤーコプ・グリムの「ドイツ神話」を読んで、「エッダ」や「ニーベルングの歌」をよく知っていたのである。

「怖れのなんたるかを知らぬ者」であったジークフリートは、竜の返り血を口に入れて、小鳥の言葉が理解できるようになり、岩山の中で炎に包まれて眠っているワルキュールの一人ブリュンヒルドの所へ行く。騎士の鎧を脱がせてみると女だったので、口づけによって目覚めさせたのだ。このあたり、グリム童話「のばら姫」(KHM50)で、糸巻き棒に刺されて百年の間眠り続けていたお姫様が王子様の口づけで目を覚ます場面とオーバーラップしてくる。ジークフリートはこの時、女を前にしてはじめて怖れというものを体験したのである。

ハゲネの説明の後、礼儀正しく出迎えた国王グンテルにジークフリートは、「勇士であるあなたと、名誉と身命を賭して所有しておられる国でも城でも一切を力づくで頂戴して、私の所領といたすつもりです」と言い放つ。この言葉に王も臣下も驚き呆れ怒ったのは当然であったが、王の弟ゲールノートの、「あなたと戦うべきいわれはない。あなたの勇士は命を失うし、我々にとっても名誉でもなく、あなたとしても益はない」とのとりなしで、この場はうまく収まったのである。ジークフリートの方も、「あてなる姫」のことを胸に思い浮かべたのであったから。ここでのゲールノートの行動は全く正しかった。日本の武士道でも、「無駄死に」は最も恥ずべきことであったのは同様である。

### Ⅲ 騎士と武士と

ジークフリートがデンマークとザクセンの連合軍と戦う第四章が、第一部前半の一つのハイライト

といえるだろう。ザクセン王リュウ - デゲールの弟であるデンマーク王リウデガストは、やはり偵察に出ていたジークフリートと偶然に出会い、激しい一騎打ちとなった。

互いに槍で突き合ったのち、馬は二人の立派な王をば  
さながら風に吹き分けられたかのように、摺れ違いに運び去った。(185)

だがこの後、ジークフリートが敵王に与えた三つの深傷はリウデガストを意気消沈させ、「彼はジークフリートに命乞いをして自分の国土を差し出し、またみずから、自分はリウデガストであると名乗った」(189)とテキストは述べる。

敵に命乞いする王とは、武士道を標榜する日本人の感覚からはだいぶ乖離しているように思われる。「葉隠」にもあるように「武士道といふは、死ぬことと見付けたり<sup>(6)</sup>」というのが日本人の持つ英雄観で、庶民であるのならまだしも、最高支配者が命乞いをするなど、まさに「恥ずべきこと」以外のなにものでもない。しかしヨーロッパで、こうした命乞いは当時の騎士にとっては習慣なのだから、別段恥ではなく、命と身代金との合理的な取引きだったのである。戦争での捕虜交換という発想も、恐らくこうした考え方の延長線上にあるのだろう。

金属や鎖帷子で出来ている騎士の鎧や兜はいかにも重たそうで、相当な体力がないと、武具を着ているだけでも既に重労働だっただろう。その上、重たい剣や楯も持ち運ぶのだから尚更大変なのである。当然ながら普段のように自由な行動はできず、鋼鉄で出来たロボットのようなぎこちない動きだった。槍で突かれて落馬すれば、もう起き上がるのも難しく、短剣で首を刺されていとも簡単に殺される危険は大きかったのである。しかし、その時「命乞いをするかどうかが問われ、命乞いをする命は助けられ身代金を支払う約束<sup>(7)</sup>」がなされたのである。そのため、首を刺すためのこの短剣はミゼリコルド(あわれみ)と呼ばれたという。

日本の場合、騎馬武者は馬上から弓を射たし、太刀でも戦った。その周りを走る歩卒(徒武者)の武器は長刀である。戦場での刀と長刀の勝負は、当然ながら圧倒的に長刀に分があった。騎馬武者がつける大鎧は弓を射るため両脇が大きく開けられ、胸部も弓の弦が引かからないように、染め革(絵鞆)で包まれていた。大腿部を守るため草摺りは、騎馬武者が馬に乗り易いよう四枚、歩卒は軽快に走りまわられるよう八枚に分割されていたという。日本の武具は金属や鎖帷子でできたヨーロッパの騎士の鎧に較べて、ずっと動きやすく軽量にできていたのである。その他、籠手や膺当なども強度はななくとも、機動力としては騎士の鎧よりはるかに機敏であった。しかも日本の武具は結構防御能力も高く、鉄砲が出現するまでは十分にその役割を果たしたのである。ただ見方を変えれば、攻撃する武器が非力であったともいえるのだが。鎧、兜が機能的で丈夫なため、矢や剣で勝負がつかぬ場合には、馬上での取っ組み合いになることもあった。「馬上で組み合い、ともに崩れ落ちる際、力に勝るほうが相手を組み敷いて、勝負は決する。馬乗りになったほうが腰刀を抜き、敵の首を切る<sup>(8)</sup>」のである。

日本の馬上の組み合いがよく知られているのは「平家物語」第九巻「敦盛最後」だろう。関東武者熊谷次郎直実が渚に馬を進ませている時、「滋籐の弓を持ち、連銭葦毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗った武者一騎が、沖の方の船をめざして<sup>(9)</sup>海に乗り入れたのを目撃したのである。「敵にうしろを見せたもうものかな。返させたまえ」と熊谷が扇でさし招くと、その若武者は引き返してきた。「熊谷は波打ちぎわで馬を押し並べ、むんずと組んでどうと落ち、取っておさえ首を搔こうと兜を押し上げてみると、顔に薄化粧をしてお齒黒をつけたわが子小次郎ぐらいの年配にあたる十六、七の美少年」であった。熊谷は彼を助けようとしたのだが、背後に味方の軍勢が迫り、「何を申すにもおよばぬ。とく首を刎ねよ」と少年に言われるまま、泣く泣く首をかき斬ったのである。少年は清盛の弟、経盛の子敦盛であった。この出来事が引金となって、熊谷は後に出家することになるのである。

その後、敦盛のことを嘆き悲しんだ熊谷は、父経盛に敦盛の首と形見の品々に哀悼の書状を添えて届けるのだ。経盛からは「わが子がよみがえって来たような気がする<sup>(10)</sup>」と、熊谷の心づかいを謝した返事があったという。

日本にはかように、騎士にみられるような「命乞い」の習慣もなかったし、「あわれみの短剣（ミゼリコルド）」もなかった。もし日本に「あわれみの短剣」があったなら、そもそも敦盛の最後の物語が伝えられることなどなかつたらう。

#### IV イースラント

第一部のもう一人の主演イースラント（アイスランド）の美しき女王ブリュンヒルトが登場するのは第六章以降である。彼女は求婚してくる数多の武人たちに、槍投げ、石投げそして幅跳びで自分を負かした人としか結婚しない、一つでも負けた男は首を失うことになる、と公言していた。

「あの女の愛を得るためには身命をも賭するつもりだ」と固い決意を示したのはグンテル王であった。彼はジークフリートに助力を頼み、ハゲネとその弟ダルクワルトの四人でライン河上の船に乗ってイースラントへと向かったのである。

王女が求婚してくる男たちを競争で負かし殺してしまう話ですぐに思い出されるのは、ギリシャ神話に登場するアタランテ（Atalanta）である。ブリュンヒルト同様彼女も、結婚するのは自分と競争して勝った男だけで、負けた者はその場で殺していたのである。

アタランテがこの青年とだけは結婚したいと思って競争に負けたように、神話「ヴォルスング・サガ」のブリュンヒルトもシグルズ（ジークフリート）と結婚したいがために、「怖れを知る人とは結婚しない」と言っていたのかもしれない。怖れを知らぬ強い男とはジークフリート以外にはいないはずだったから、「ヴォルスング・サガ」や「エッダ」はこの伏線となっている。

しかし、こうしたゲルマン神話を知らない読者は、「ブリュンヒルトのことはジークフリート殿がよく



心得ておられるから」というハゲネの台詞に戸惑うだろう。

「エッダ」の中で「グリーピルの予言」の章は、叔父であるグリーピルがシグルズ（ジークフリート）の将来を予言し、粗筋は比較的分かり易くなっている。それによると、ブズリ王の娘ブリュンヒルドはオーディンによって眠りの茨で刺され、炎の中で眠っていた。その炎を越えて来た怖れを知らぬ勇士シグルズとブリュンヒルドは愛を誓ったはずなのに、彼はキューキ王の妻グリームヒルドの魔酒によって彼女を忘れてしまったのだ。そしてシグルズはグリームヒルドの娘グズルーンと結婚し、ブリュンヒルドの方はゴートの王グンナルと結婚することになる。

グリーピルは言う。「シグルズとグンナル、二人の婚礼が、キューキの広間で同時に祝われるのだ。家に戻れば姿は元に戻るが、それぞれその考えは変えないでいる。（中略）グズルーンとはしあわせな生活を送れよう。だが、ブリュンヒルドのほうは、不幸な結婚をしたと考えて、その復讐に策をめぐらすことになる<sup>(11)</sup>」。

ここにも「ニーベルンゲンの歌」への大いなるヒントが残されている。神話でのシグルドがグリームヒルドの娘グズルーンと、そしてブリュンヒルドがゴートの王グンナルと結ばれるのに対して、「歌」の方のジークフリート（ジーフリト）はグンテル王の妹クリエムヒルトと、ブリュンヒルトはグンテル王と結ばれているのだ。ジーフリトがブリュンヒルトと交わした愛の誓いを忘れてしまったのは、魔法の心得のあるグリームヒルドに飲まされた酒のせいであったことが神話からわかる。「ヴォルスング・サガ」の中で、グズルーンは黄金色をした美しい鷹が自分の手にとまった夢を見て、「その鷹を失うよりは全財産を投げ出したほうが良い」とさえ思うのだ。その夢の意味を探るべく、彼女が山の上の館に住むブリュンヒルドに聞きに行くと、次のような答であった。

「後に実際に起る通りに解釈しましょう。わたしが夫にと選んだシグルズがあなた方のところに行くでしょう。グリームヒルドが彼に毒を混ぜた蜜酒を与え、それがわたしたちみんなを途方もない悲しみにつきおとすのです。あなたは彼を夫にむかえるが、すぐに失い、それからアトリ王に嫁ぐ。あなたは兄弟を失い、アトリを殺すことになるでしょう<sup>(12)</sup>」

「エッダ」や「サガ」でのジークフリートとブリュンヒルドの結婚の約束と、それを忘れてしまったジークフリートの行動を考えると、捨てられたブリュンヒルドの悔しさも理解できようというものだ。根底にこの恨みがずっと続いていて、それがハゲネを介したジークフリート暗殺に繋がったとしても不思議はないだろう。

魔酒のせいかどうかは不明だが、いずれにしてもブリュンヒルトと愛を交わしたことなどすっかり忘れてしまったジークフリートは、グンテル王に助太刀すべく、あっけらかんと一緒に出かけていくのである。

ブリュンヒルトの城で一人の家臣が四人の騎士の品定めをするシーンは、以後の物語の展開を暗示していてなかなか面白い。「ジークフリートに似た男は歓迎すべきだし、もう一人の誉れ高そうな人物は王国の支配者かもしれない。そして一番若い武士は、淑やかで作法正しく優雅だ」と彼は主張し

ていた。しかし、ハゲネに関しては次のように評したのである。

「一行の第三の男(ハゲネのこと)は、しばしば荒々しい眼つきをするので、いかにも怒りっぽく見えますが、しかし逞しい体格をいたしております。女王様。どうもあの男は、心柄の険しい人間かと愚案いたします」(413)

ブリュンヒルトの華麗な衣装についての描写があった後、すぐに競技用のずっしりと重たい円石が運ばれてきた。「十二人の剛勇な武士がようやくこれを運んできたのである」(449)。これにはハゲネも流石に、「あの女王は地獄で悪魔の花嫁になればよい」と思ったほどであったという。テキストも「もしジーフリートが王に助勢しなかったら、彼女は王の命をうばったに違いあるまい」(452)と述べる。怯んだグンテル王に、隠れ蓑で姿を隠したジークフリートが、「心配ありません。あなたはただ身振りだけなさるのです。実際の技は私がしますから」と安心させたのだ。

女王の槍投げは当たった鋼鉄の楯から火花が散るほど激しかったものの、ジークフリートが力を奮って投げ返した槍は更に強烈で、「女王の勇力をもってしても、この槍の力は支えられなかった」(460)のである。

同様に、円石投げも幅跳びもジークフリートの力によってグンテル王の勝利となり、敗れたブリュンヒルトは潔く家臣たちに「おん身たちはこれから、グンテル王の臣下となるのだ」と宣言したのである。彼女にはちっとも女々しさなどなく、むしろ悟りきった武士のように思い切りがよい。

槍投げや石投げ、幅跳びなどのスポーツ競技は中世の人々に大いに好まれた遊びで、運動神経の優れた者は皆の羨望的となっていたのである。パソコンや様々なゲーム機器などまるでなかった昔、人々がこうした単純な遊びに夢中になって興じていたのは容易に想像できるだろう。「ニュルンベルクでも、市参事会は1434年にハラーヴィーゼというペグニッツぞいの美しい緑地を買い入れ、市民の憩いと競技の場としていました<sup>(13)</sup>」。ところが、多くの市民が走ったり石を投げたり、踊ったりしているうちに競技に賭ける者たちが現れ、暴力沙汰に発展したこともあって、市参事会は武器やナイフの持ち込みを禁じ、違反者には罰金を科さざるをえなくなってしまったという。

さて、ブリュンヒルトとグンテル王の表向きの決着がついた後、隠れ蓑を脱いで姿を現したジークフリートは、「まだ、試合は始まらぬのですか」ととぼけ、ハゲネも女王に、「ラインの国王が試合で勝利を得られた時、(ジークフリートは)舟のところに行っていて、一向何も知らなんだのです」と加勢した。

ジークフリートがブリュンヒルトとの試合で、隠れ蓑をまとして王の助太刀をする設定も愉快である。自分の方からだけ見る事ができて、相手から自分はまるで見えないとは、人間にとって一つの憧れの世界かもしれない。何しろ、己はいつも安全圏に身を隠していて、相手の動向を完璧に把握で

きるのだから。現代のマスコミやインターネット社会における匿名性や、悪意のない正義感を持つ人々による批判、中傷なども同じことであろう。サングラスやマスクなども人の視線から己を守る小道具の役割を果たし、これらを一度身につけた後で手放すには勇気がいる。

それにしても、ジークフリートがまとう隠れ蓑は、ギリシャ神話の英雄ペルセウスが被った「魔法の帽子」になんと良く似ていることだろう。ペルセウスはアテナ女神の指示によるメドゥサ退治の難業を成し遂げるためニンフたちに助けを求め、「被ると身体が見えなくなる帽子」「翼のある靴」「メドゥサの頭を入れる袋」という三つの品を貰った。ゴルゴン三姉妹のメドゥサの首を刎ねた後、不死身のステンノとエウリュアレに追われたペルセウスはこの帽子を被って身体を隠し、無事に逃げおおせることができたのである。

## V 美女の諍い

グンテル王を助けたジークフリートは、望み通り王の美しき妹クリエムヒルトを妻とする事ができたのだ。ここにグンテル王と女王ブリュンヒルト、そしてジークフリートとクリエムヒルトという二組のカップルがめでたく成立したというのに、四人が並んで座った時、ブリュンヒルトは突然泣き始めた。その理由を尋ねるグンテルに彼女は、「国王の妹であるクリエムヒルト姫がただか一人の臣下にすぎぬジークフリートと並んで座っているのが気に入らない」と言う。グンテルが「ジークフリートは自分の臣下ではなく、実はある広い国の王なのだ」といくら説明しても、彼女はまるで聞く耳を持たなかった(第十章)。絶世の美女であった二人の間には、既にこの時点で大きな諍いの兆しは芽生えていたのである。

国王グンテルとジークフリートが並んで座ったぐらいでどうしてブリュンヒルトが泣き出したのか、我々にはあまりピンとこないかもしれないのだが、もう十字軍の時代以前からヨーロッパ人の非ヨーロッパ人・非キリスト教徒を劣等人間(Untermensch)と見なす立場は確立しており、この断絶は自分たちの内部にも階層を作って厳しく区分されることとなっていたのである。日本の士農工商にあたる身分制度がヨーロッパでは僧侶・貴族・市民・農民で、日本に較べてはるかに少数の特権階級だけが「本当の人間」として下々の人間とは明確に一線を画していたのである。ヨーロッパの支配階級と被支配階級との間には厳しい断絶があり、彼らの身分意識はいまだに日本よりずっと強力なのだ。「支配者と被支配者ははっきりした一線によって割られ、どちらともつかないあいまいな存在はない。支配階級はあくまで孤高の特権階級で、必要もないのにほかの連中をよせつけたりはしない<sup>(14)</sup>」

こうした背景を考えると、ブリュンヒルトの嘆きも少しはわかってこようというものだ。この後、彼女と共に寝所へひきあげた王は美しい妃の愛を勝ち得るところか、「事の筋道がわからぬ中<sup>むすめ</sup>は、処女のままでいるつもりです」と強く拒絶されてしまう。それでも彼女の愛を戦い取ろうとし

た王は、逆に手足を縛られた揚句、一晚中みじめにも壁に吊るされてしまったのである。この結果グンテル王は、またまたジークフリートの助けを借りて彼女を屈服させざるをえなくなった。つまり彼の結婚は最初から大変な無理があったということだ。

「今宵のうち私は隠れ蓑をきて、誰にも私の計略を気づかれぬよう、こっそりとあなたの寝所へ忍びこみましょう」と言うジークフリートに王は、「もしおん身がわしの恋しい妃を愛するようなことさえしなければ、欣んでそうお願いしよう」と答える。これに対してジークフリートは、「真心にかけて愛することはしません。私にはすべての婦人にまさっている美しいお妹君がいるのですから」と王を安心させたのだ。グンテル王としては、妻となった女傑プリュンヒルトを早く抱きたいと熱望している一方で、彼女がジークフリートに手籠めにされてしまうのを恐れたのである。

「イーリアス」の不死身の英雄アキレウスを思い出そう。はるかな昔、彼は女武者からなる部族アマゾン(「乳なし」の意)の女王ペンテシレイアを打ち負かした後に、彼女を犯したのである。一説によるとペンテシレイアの方が強く、彼女がアキレウスを殺したのにゼウスが彼を蘇らせたのだという。いずれにせよ女王を殺したアキレウスは、彼女の死顔のあまりの美しさにその死体を犯してしまったのだ。ホメロスは、アキレウスが死姦をやってしまったほど、女王ペンテシレイアの死体は美しく、彼は本気で愛してしまったのだとしているけれど、別なレベルで考えてみると、死姦は女王に復讐心を起こさせないまじないだったのかもしれない。「ギリシャ人はアマゾン女人族を『美しき人々』と呼んで、神殿を建て、トロイ戦争後何百年も、その霊を慰めるために生贄を捧げた<sup>(15)</sup>」のだから。

女王は死後、立派な英雄として手厚く葬られたようだ。しかしいくつかの物語はまるで反対に、「彼女は目を抉られた後、片足を引きずられて川に投げ込まれた」と伝えている。ペンテシレイア(Penthesileia)とは「男を悲しませる者」の意である。

## VI 帯と指環

グンテル王に頼まれたジークフリートは再び隠れ蓑をまとって姿を消し、王の寝所でプリュンヒルトと格闘の末、「彼の大力が姫に甚だしい苦痛をあたえたのである」(676)。こうしてプリュンヒルトはグンテル王の妻となり、ジークフリートは「着物でも脱ぐようなふりをして、その場から退いた」のだが、その時彼は何を思ったのか、王妃が気づかぬ隙にその手から黄金の指環を抜き取り、更に上等な絹の帯までも奪って来たのであった。そしてあるうことか、彼はそれを妻クリエムヒルトに与えたのだ。テキストは彼のこの行為を、「それが禍の種となった」(680)と述べている。ジークフリートが妻にだけは己の強さを自慢したかったのか、あるいは勝利の証拠として保存しておこうと考えたものか、よくわからない。

プリュンヒルトにしてみればグンテル王に打ち負かされたものとばかり思っていたのだから、その

後、彼と「相並んで臥した」のは当然であった。そして憤怒や羞恥心まで捨て去った結果、彼女は持てる力を失ってしまったのだという。まるでそれは、壊された硬質ガラスがもう二度と元の姿に戻せぬのにも似ていた。

ジークフリートが奪った帯と指環は、どちらも「結びつける(縛る)」と同時に「切り離す」象徴性を帯びている。「古代ローマの習慣では、ユピテルの神官フラーメンは『割れて宝石を欠いた』指環しかはめる権利がなかった。このような禁制の理由は『呪術師の体の一部を完全に囲むようなあらゆる紐の類は、その超自然的な力を体内に閉じ込め、外部世界に力を及ぼすことを妨げた』からである<sup>(16)</sup>」

縛ったり結びつける役目を持つ夢は、安心・勇気・力を与える一方で、服従・自由の束縛をも表している。これはまさに寝所におけるプリュンヒルトが最初の晩、グンテル王を縛り上げた後安心して眠りこみ、王は全く自由を奪われていた状況とぴったり符合している。

ここで、ジークフリートがプリュンヒルトから盗んできた帯と指環について、ヨーロッパの神話をヒントに、もう少し考えてみよう。木曜日 (Donnerstag つまり雷の日:Thursday) の語源となっているゲルマン神話の雷神ドナル(トール)は、武器の石槌以外に二つの神器を持っていた。それは「胴の周りに締めるや否や彼の四肢の力を倍加するという腹帯と、彼の槌の柄を手につかんでおくために必要であった鉄の手袋<sup>(17)</sup>」であった。強さの象徴であった帯 (Gürtel:girdle) は、実際「1420年頃まで武具の一部であった<sup>(18)</sup>」という。兵士にとって「帯を解く」とは武装解除、つまり降伏を意味していたから、ジークフリートが打ち負かしたプリュンヒルトの帯を奪ったのは理に適っていたのかもしれない。古代ギリシャ・ローマで娘が帯を解くとは「身を任せた」意味であり、「亭主に無理につけさせられた貞操帯と反対に、婚礼の夜、夫に解かれるまで娘が誇らかに締めていた処女帯は、そこに由来する<sup>(19)</sup>」という。

英雄が同じように帯を盗むのは、「ギリシャ神話」のヘラクレスである。彼の「十二の難業」のうちの第九番目「アマゾンの女王ヒッポリュテの帯」がそれだ。

珍しいものが大好きなエウリュステス王の娘は、女ばかりの勇猛な部族アマゾンたちの女王ヒッポリュテの帯を欲しがっていた。そのためヘラクレスは、彼女らの住む小アジアのテルモドン河畔へと出かけて行かねばならなかったのである。

「ヒッポリュテの帯は彼女が父アレス神より一族の支配者のしるしとして受領したものだったが、ヘラクレスがそれを譲ってほしいと申し出ると、女王は好意を示し、意外にあっさり譲り渡す約束をしてくれた。しかし、英雄がそんなにも簡単に成功することを怒ったヘラは、アマゾン族の女に扮してアマゾン族の先頭に立ち、女王が連れ去られると言って、ヘラクレス軍を襲った。女王のヒッポリュテが約束を破ったと思ったヘラクレスは女王を殺し、帯を奪い取って出帆した<sup>(20)</sup>」

ヘラクレスが差し出したこの帯を王が最後にアルゴスにあったヘラ女神の神殿に奉納したというのも、ひも帯の魔力を恐れたためかもしれない。アキレスやヘラクレス、そしてテセウスというギリシャ神話の名うての英雄たちが、皆揃いもそろってアマゾンたちと戦わざるを得なかったとは面白い。

弓を引く邪魔になるから右の乳房を切り取っていたというほどの勇猛な女部族の存在は、ギリシャ人たちにとって大きな脅威だったのである。実際、ヘラクレスにヒッポリュテのひも帯を盗まれて怒ったアマゾン女人族は、ギリシャ沿岸都市に侵攻し、アテネを包囲攻撃している。「アルテミシアという名のアマゾン女部族の女王は、その後、クセルクセスと力を合わせてサラミスの戦いでギリシャ軍と戦った(紀元前480年)。これは女王がペルシャ人が好きだったからではなく、ギリシャ人を憎んでいたからであった<sup>(21)</sup>」ということだ。

帯も指環も本質的に絆を示して、「結びつけるもの」の役割を持っている。昔は、いざという時の自殺用に指環に毒薬を仕込んだり、敵を引っ搔いて殺すという物騒な使い方もあったようだが、指環は本来結婚に代表されるごとく、共同生活や運命を共にする誓いの証である。キリスト教でそれは自由意志による献身の象徴であり、旧約世界では権力を意味していた。権力の委任は印章の付いた指環で行われたのである。ジークフリートは斯様に様々な象徴性を持つ指環をいとも気安く奪い取ってしまったのだから、やはりその罪は大変に重かったのである。

プラトンは「国家」の中で、ソクラテスの兄グラウコンにギュゲスの不思議な指環について語らせている。羊飼いとしてみればリュディア王に仕えていたギュゲスは、ある日地震の後にできた大地の裂け目から中へと入って行く。色々あった不思議なものの中で特に彼の目を引いたのは、小さな窓がついて中が空洞になっている青銅製の馬であった。身をかがめて小窓から覗き込んでみると、そこには何も身につけていない等身大の屍体らしきものがあり、指に黄金の指環を嵌めていた。彼はそれを抜き取って穴の外に出たのである。

「さて、毎月羊たちの様子を王に報告するためにおこなわれる羊飼いたちの恒例の集まりがあったときのこと、そこにギュゲスも、例の指環をはめて出席した。そうして、ほかの羊飼いたちといっしょに坐っていたとき、ふと何気なしに、指環の玉受けを自分のほうに、手の内側に、回してみた。するとたちまち自分の姿が、かたわらに坐っていた人たちの目に見えなくなってしまう、彼らは、ギュゲスがどこかへ行ってしまったなどと、自分のことを話しあっているではないか！ 彼はびっくりして、もう一度手さぐりで指環にさわると、その玉受けを外側に回してみた。すると、彼の姿が見えるようになった。

このことに気づいた彼は、その指輪にほんとうにそういう力があるのかどうかためしてみたが、結果は同じこと、玉受けを回して、内側に向けると、姿が見えなくなり、外側に向けると、見えるようになる。これを知ってギュゲスは、さっそく、王のもとへ報告に行く使者の一人に自分が加わるようになり、そこに赴いて、まず王の妃と通じたのち、妃と共謀して王を襲い、殺してしまう。こうして、王権をわがものとした……<sup>(22)</sup>。」

透明人間になりたい願望は、大昔から人々が抱き続けてきた叶わぬ夢だったのであろう。自分の姿がまるで人の目につかないのなら、何だって好き勝手にできるのだから。ここでの命題は、それでも尚「正しい人」は正義のうちに留まって、他人の物に手を付けず「鋼鉄のように志操堅固な者」でいられる

だろうかというのである。この章は次のような言葉で一段落している。「市場からだって何でも好きなものを、何おそれることもなく取ってこられるし、その他何ごとにつけても、人間たちのなかで、神さまみたいに振舞えるというのに！ こういう行ないにかけては〈正しい人〉のすることも〈不正の人〉のすることと何ら異なるところがなく、どちらもまったく同じところへと赴くでしょう<sup>(23)</sup>」

ギュゲスの指環について考察してみるならば、それは我々の知り得ない未知なる世界(彼岸)からこの世(此岸)へのプレゼントだったのだろう。ギュゲスの力が指環の玉受けを自分の手の内側に回した時にだけ働くということは、人間の中に真の力が潜んでいるということを表している。つまり、教えとは内面世界からやって来るということだ。一方で、ギュゲスの指環は内的生活の至高の境地、恐らくは神秘学そのものを象徴しているとの説もある。「しかし、この象徴の二面性は、我々自身の中にも見出される。指環の力は神秘的獲得に導くが、しかし同時にその魔力を悪用すれば、犯罪的勝利や圧政にいたる。ギュゲスの場合そうなってしまった<sup>(24)</sup>」

ジークフリートの場合、透明人間になれたのは指環の力ではなく、侏儒アルプリッヒから奪い取った隠れ蓑であったが、それを悪用したために最後に身を滅ぼすのはギュゲスと同様であった。ジークフリートの全面的な助力で、グンテル王の「美しき女傑プリュンヒルトと相並んで臥す」目的は叶えられたのではあったが。

この後ジークフリートはクリエムヒルトを連れてニーデルラントに戻り、幸せな十年の月日が流れる。夫婦に一人の王子が生まれた頃、グンテルとプリュンヒルトにも同じく王子が生まれ、それぞれに相手の勇士の名がつけられた。

しかし、グンテルの妃プリュンヒルトは依然として、「夫の家臣であるジーフリトが久しいこと宮廷に伺候もしない」のはけしからんと思っていたのである。元々一国の女王であった彼女の特権意識は、格別に強力なのであった。

「ジーフリトとお妹君とが、この国へきて、私たちと対面できれば、こんなに嬉しいことはございません」と言葉巧みに言う彼女に、決して二人に会いたくない訳ではなかったグンテル王も、「兩人に使いをやって、このラインへ来るように計らおう」(731)と応えたのだ。この段階で果たしてプリュンヒルトにどの程度の下心があったのかはわからないけれど、彼女の中では徹底した差別と断絶の意識がずっと燻り続けていたのだから、再会したならクリエムヒルトとの確執が激しくなるのは目に見えていた。

切掛けは本当に取るに足らぬ些細なことであった。

二人の王妃が武技の催しを見るために並んで座っていた時、クリエムヒルトが「私の夫は、すべてこれらの国々を支配するだけの力量のある人であると存じます」と他愛のない亭主自慢を始めたのである。この時、プリュンヒルトが無視するか、あるいは適当にやり過ごしていたなら悲劇も起こらなかっただろうに、彼女はすぐ、「そんなはずはございませんまい」と激しくクリエムヒルトの言葉を打ち消したのである。「グンテルが生きているかぎり、そんなわけには参りません」

後はもう売り言葉に買い言葉で、美しい女同士の醜い争いが続き、「ジーフリト殿がご自身で自分は国王の家来であると申されたのです」とプリュンヒルトが言えば、クリエムヒルトも「あの人があなたの臣下なら、こんなに長い間、安閑と貢ぎ物を怠っていたのは奇妙なこと」と負けてはいない。

そしてこの後、教会の中へどちらが先に入るかという実につまらない意地の張り合いで二人の言い争いはぶり返す。「臣下の妻の分際で、国王の妃に先立つという法はありますまい」と強気にあくまでも最高権力者であろうとするプリュンヒルトに、クリエムヒルトはついに「側妻そばめの身分で王妃になれたものがありましたか。あなたの処女を手に入れたのは兄上ではなく、夫ジーフリトです」と秘密を暴露してしまったのである。悔しさに泣くプリュンヒルトにかまうことなく、クリエムヒルトは従者たちを引き連れてさっさと先に寺院の中へと入ってしまう。「ここに非常な憎しみの念が生じ、そのため晴れやかな眼も曇り且つ濡れたのである。— それを後にあまたの勇猛果敢な勇士が償わねばならなかった」とテキストは述べている。

何とも大人げない二人の女の諍いではあるが、前述したように、ヨーロッパ社会の支配者と被支配者とははっきりした一線によって劃され、その違いは決定的だったのである。プリュンヒルトにとって義妹とはいえ、階層が下だと思っている者に、しかも多くの人々の前で侮辱されたのは絶対に許しがたいことであった。この激しい断絶意識は別段プリュンヒルトが特別だった訳ではなく、当時としてはごく普通の考え方であった。それどころか、そんなヨーロッパ人の階級意識は、現代までも脈々と生き続けているのだ。

こんな身分制度など、人間が勝手に作り上げた甚だしい加減、且ついかかわしいものなのだが。まさしくジョン・ポール<sup>(25)</sup>が主張した如く、「アダムが耕シイブが紡ぐ時、だれが領主であったか」なのである。ヨーロッパの貴族とは、元々が戦争のために育てられてきた人種である。イギリスを含めたヨーロッパで、ノルマン系貴族の家系を歴史家が調査した結果、殆どが1050年頃まで遡れるものの、それ以前は不明であったという。「これらの家柄は、イギリスを、シチリアを、さらにイタリアの大部分を征服したさまざまの侵略軍団に属するノルマン人であった。その多くは、元をただせばつまらない山賊であり、たまたま侵略軍に参加した<sup>(26)</sup>」だけだったのである。日本の藤原氏だって、元を辿れば中臣を名のる古代の中央豪族にすぎなかったではないか。鎌足が中大兄皇子と共に蘇我入鹿を暗殺し、大化の改新を断行して重鎮となった結果、冠位制で最高の大織冠たいしよつかんと藤原朝臣の姓を天皇より授けられたのだ。この冠位を授けられたのは鎌足だけだったという。

いずれにしても、階級意識等という虚飾に満ちた実につまらぬ身分制度に拘泥した二人の女のために、多数の男たちがはかなく命を落とす結果になったのである。原因を作ったのは確かにジークフリートの盗んだ帯と指環ではあったけれど、その責任は、叶わぬはずの恋を無理矢理叶えようとしたグンテル王に行きつくだろう。プライドの高い人間ほど、えてして他人のプライドにはまるで無関心なのである。



註

- (1) 山本常朝「葉隠」(奈良本辰也編)。角川文庫。昭和 48 年。
- (2) トロゲネ (tronje) とは現在のドイツ・キルヒハイムとも、フランス・セーヌ河畔のトロワ、あるいはベルギーのトゥルネーともいわれるけれど、確たる証拠はない。
- (3) ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』武村信夫・他訳。大修館書店。1989 年。
- (4) 「アイスランド・サガ」谷口幸男訳。新潮社。1979 年。
- (5) (4) と同書。
- (6) (1) と同書。
- (7) 阿部謹也「甦える中世ヨーロッパ」。日本エディタースクール出版部。1987 年。
- (8) 小林保治編「平家物語ハンドブック」。三省堂。2007 年。
- (9) 「平家物語」(日本文学全集 4)。中山義秀訳。河出書房新社。昭和 42 年。
- (10) (9) と同書。
- (11) 「エッダ」谷口幸男訳。新潮社。昭和 48 年。
- (12) 「ヴォルスング・サガ」(アイスランド・サガ)谷口幸男訳。新潮社。1979 年。
- (13) 阿部謹也「中世の窓から」。朝日新聞社。昭和 56 年。
- (14) 鯖田豊之「肉食の思想」。中公新書 9 2。1966 年。
- (15) バーバラ・ウォーカー「神話伝承事典」山下主一郎・他訳。大修館書店。1988 年。
- (16) ジョン・シュヴァリエ「世界シンボル事典」金光仁三郎・他訳。大修館書店。1996 年。
- (17) E・トンヌラ・他「ゲルマン・ケルトの神話」清水茂訳。みすず書店。1960 年。
- (18) アト・ド・フリース「イメージ・シンボル事典」山下主一郎・他訳。1984 年。
- (19) (16) と同書。
- (20) マイケル・グラント「ギリシャ・ローマ神話事典」西田実・他訳。大修館書店。1992 年。
- (21) (20) と同書。
- (22) プラトン「国家」(世界の名著 7)。田中美知太郎訳。中央公論社。昭和 44 年。
- (23) (22) と同書。
- (24) (16) と同書。
- (25) John Ball(?~1381)無階級の社会を説いた革命家。
- (26) T・P・レゲット「紳士道と武士道」。サイマル出版社。1973 年。

Text

1. Das Nibelungenlied : Übersetzt von Felix Genzmer : Philipp Reclam jun. Stuttgart.1992.
  2. Das Nibelungenlied (Eine Auswahl): Philipp Reclam jun. Stuttgart.2000.
  3. Auguste Lechner: Die Nibelungen : Arena-Taschenbuch: Innsbruck. 2010.
- 邦訳引用は我が恩師、(相良守峯訳「ニーベルンゲンの歌」: 岩波文庫。昭和 47 年)による。

参考文献

1. Die Nibelungen : herausgegeben von Joahim Heinzle und Anneliese Waldschmidt:  
Suhrkamp. Frankfurt a.M. 1991.
2. Peter Nusser : Deutsche Literatur im Mittelalter :Alfred Kröner.Stuttgart. 1992.
3. V.Mertens/U.Müller : Epische Stoffe des Mittelalters : A.Kröner.1984.
4. H.Sieburg : Literatur des Mittelalters : Akademie Verlag. Berlin.2010.
5. E.R.Haymes : Das Nibelungenlied : Wilhelm Fink Verlag. München.1999.
6. Otfrid Ehrismann : Nibelungen Lied Epoche-Werke-Wirkung : Oscar Beck. München.1987.
7. L.Brinker v.d.Heyde : Die Literarische Welt des Mittelalters : WBG. Darmstadt. 2007.
8. N.R.Miedema : Einführung in das „Nibelungenlied“ : WBG. 2011.
9. J.Heinzle : Die Nibelungen Lied und Sage : Primus Verlag. Darmstadt.2005.
- 10.Interpretationen Mittelhochdeutsche Romane und Heldenepen :Reclam. Stuttgart.2004.
- 11.Kai Bremer : Literatur der Früher Neuzeit :W.Fink. Paderborn. 2008.
- 12.K.Ruh : Höfische Epik des deutschen Mittelalters : E. Schmidt . 1980.